

小山聡子 編

『前近代日本の病氣治療と呪術』

本書は、本会会員の小山聡子氏が2016～2018年度に研究代表者として取り組んだ科研費共同研究「前近代日本における病氣治療と呪術の研究」(基盤研究(C), 課題番号16K02217)の成果として、共同研究者・研究分担者等と共に執筆した論文集である。本科研費は「思想史」の分野で獲得されたものであり、編者の意図を本書序文から引用すれば、「呪術による病氣治療の歴史」を通して、「前近代に生きた人々の精神世界の実像に迫ることを目的としている。

従来、呪術を対象とした研究と言えば、主に民俗学・文化人類学やサブカルチャー研究などの領域で行われてきたように思うが、それらとは一線を画し思想史・文化史といった史学的立場から呪術について考察することに本書の狙いがあると思われる。

私事にわたって恐縮ながら、近年、筆者の日本漢学ゼミナールでは卒論に妖怪を取り上げる学生が毎年のようにいる——筆者の専門から遠いためやむなく近世儒者の随筆を参照するようアドバイスしたりしている。呪術と妖怪では違うかもしれないが、前近代精神史という視点から見れば通じる点があり、本書が提示している問題意識は多くの人々の関心を惹き得るものと思われる。

本書は三部構成からなっており、第1部では古代から明清にいたる中国における呪術が論じられている。日本における呪術を文化史の視点で取り扱おうとすれば、東アジア、とりわけ中国文化の影響を考えざるを得ないからである。それを受けて、第2部・第3部では日本における呪術と病氣治療が様々な角3から考察されている。その構成と目次を転記しておこう(敬称略、副題も省略した)。

第1部 東アジアの視点からの問い直し

- ・中国古代の祭礼形成(牧角悦子)
- ・東アジアの視点から見る日本陰陽道の病氣対策(張麗山)
- ・清末以降の発病占の変容とその社会史的意義(佐々木聡)

第2部 古代・中世の様相

- ・『日本霊異記』所載の盲目説話をめぐって(水口幹記)
- ・神祇官卜部と病(大江篤)
- ・平安時代におけるモノノケの表象と治病(小山聡子)
- ・日本中世における病・物氣と陰陽道(赤澤春彦)

第3部 近世における展開

- ・病氣治療と神話・祈祷(斎藤英喜)
- ・江戸時代医学史からみた病氣治療と運氣論(町泉寿郎)
- ・忍術書に見る病氣治療(山田雄司)
- ・神職者たちの憑霊譚(近藤瑞木)

すべての論文が医学・医療と関係があるわけではないが、本誌掲載論文ではあまり取り扱われない、「陰陽道」「モノノケ」「祈祷」「忍術」が取り上げられていて、特色ある論文集になっている。学術研究でも一般社会においても、情報化社会が進行する一方で、人知を超えた不可思議な事象への興味関心が高まっているかに見える。かつて「陰陽道叢書」を刊行した名著出版からは、折しも「新陰陽道叢書」全5巻(第1巻古代、第2巻中世、第3巻近世、第4巻民俗・説話、第5巻特論)が刊行され始めた。

(町 泉寿郎)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、TEL. 075(533)6860、2020年4月、A5判、306頁、8,000円+税]